

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	全職員が目にしやすいうビングに法人の理念を額に入れて貼り出し、職員同士が常に理念を共有しながら、さらに理念を意識した介護サービスの提供ができるよう努めている。	法人の理念6項目を基にした「人としての尊厳を重視する」「自立を支援する」「プライバシーの尊重」「地域の中の自由な生活を支援する」「家庭的な楽しい雰囲気の中で役割を持つ」というホーム理念5項目が掲げられ、接遇に関する毎月の目標も策定し実践に繋げている。それらはホーム内の目につく場所に掲示され、毎月の職員会議で振り返り、意識するようにしている。職員に理念に反するような行動が見られた場合には、その都度管理者から注意するようにしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	平成26年より毎月第3水曜日に開催される「健康達人クラブ」や地元諸区のふれあい会食会や文化祭へ参加し地域の皆さんと交流を深めていたがコロナウイルス対策のため開催が中止となることや法人内の他事業所でコロナ感染発生などがあり参加できない状況が続いたため地域交流が中止となっている。	法人として地元区へ協力費を毎年納めている。新型コロナが広まる前は地区の会食会や文化祭等の様々な行事に参加したり、また、地元の小学校や中学校の音楽会や運動会に招待されたり、ホームの行事に踊りのボランティアが来訪するなど、地域との密接なかかわりが持たれていたが、この数年はコロナ禍によりすべての交流が自粛となっている。そのような中でも区長と随時情報交換を行ったり、小学校よりビデオレターが届いたり、小学生と年に3~4回ほどお互いの作品や手紙を送り合ったりしてできる限りの交流を行っている。今年、地区の夏祭りが久々に再開され、ホームの南側の庭までこども神輿が入り、利用者もりビングから眺め楽しんだという。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	水明小3学年児童との交流は直接会って触れ合うことはできなかったが年に3~4回程度お互いの作品や手紙を送りあったり、また小学生から入所者宛のビデオレターのDVDを送っていただき、鑑賞し関係を絶やさないよう努めてきました。中学生の福祉体験学習はコロナウイルス対策のため中止となっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	令和3年度以降もコロナウイルス対策のため、書面による会議の開催としていましたが、令和5年9月以降はグループホーム内での対面会議に戻すこととしました。委員さんに入退所の状況や入所者の状況、施設整備関係、ワクチン接種の状況などについて報告し、委員さんからはご意見、ご質問などをお聞かせいただき、それらを参考にサービス向上に活かしていくこととしています。	例年通り2ヶ月に1回開催している。利用者、家族、区長、民生委員、隣人、市高齢者福祉課職員、地域包括支援センター職員、ホーム関係者が参加し、利用状況や行事報告などを行ったり、ホームの防災訓練に参加していただき意見などを頂いているが、今年9月までは新型コロナ感染予防の観点から書面での会議としていた。各委員からは施設の取り組みなどについて質問があり、まとめて書面で回答している。11月以降については委員に参集していただき対面での開催を予定している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	令和3年度以前は3ヶ月に1度、介護相談員が来訪し利用者と話したり、毎月行われる市内4グループホームが集まったの会議では市職員、地域包括支援センター職員も加わり事例検討を行ってきたが、コロナウイルス対策のため介護相談員の来訪は中止となり、市や包括支援センター、他のグループホームとの会議は電話やメールでの意見交換の場となりましたが今年度よりサービス調整会議には出来る限り参加している。	市高齢者福祉課や地域包括支援センターとは随時情報交換や相談を行っている。新型コロナ禍ということで認知症サポーター養成講座やグループホーム部会の開催、介護相談員の来訪等は休止となっているが、市主催のサービス調整会議は開かれており職員が出席し情報交換を行っている。また、市内のグループホームとのやり取りについては電話などで問い合わせをしている。更に、介護認定更新の際には調査員が来訪し、感染防止策を取りながら管理者と看護師が立ち会い、情報を提供している。	

グループホーム柳橋

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	認定基準において入所者の「生命又は身体を保護するため緊急やむを得ない場合を除き」身体拘束を行ってはならないとされており、年2回職員研修を実施している。令和3年度以降で1名の方の部分的身体拘束を令和3年12月に指針に基づいて実施をした。玄関や各階の入口の施錠等については、防犯と転倒等の危険防止の観点から簡単な施錠をしているが身体拘束措置とは捉えていない。	「身体拘束等の適正化のための指針」が整備されており、年6回の運営推進会議のうち年4回身体拘束適正化委員会を同時開催し、身体拘束ゼロに向けて話し合っている。また、法人内の身体拘束虐待防止委員会でも現状の報告を行い、身体拘束をしないケアを実践している。更に、ホームの年間研修計画には身体拘束や虐待の研修があり、職員は受講して人権意識を高めている。現在、所在確認や転倒防止のためセンサーマットを使用している方がいるが、使用の妥当性について随時検討を重ねている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	関連法は、機会あるごとに学習する努力をしている。特に月々のカンファレンスの際に学習会を行い学びながら防止に努めている。また言葉の虐待についても接遇に取り入れて気をつけている。グループホーム外での虐待の事実を確認することの難しさを理解しつつ介護従事者として見過ごさないことを念頭においている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	単身利用者の財産や金銭管理について、成年後見制度の活用を促す事例が多くなっている。施設でも学習会を行い、成年後見制度について理解を深めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用契約書の締結に際しては懇切丁寧な説明に努め、家族や身元引受人の不安を取り除く努力をしている。なお、報酬改定や利用料の改定時には家族あて文章を送付し、改定内容について詳しく説明し理解してもらうよう努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	コロナウイルス対策のため以前のように各種行事や家族が面会に訪れる機会がないため、お便りで利用者の様子を伝えるとともに、電話や手紙などで利用者や家族の要望や意見を聴くよう努めている。日常的に、利用者の生活要望に迅速に応えることが大切で、必要であることを職員全員で心がけて対応している。	何らかの形で意見や要望を伝えることができる利用者からは、その都度傾聴し、困難な方からは仕草や表情などから汲み取り、申し送りや職員会議で検討するようにしている。新型コロナが5類に移行した5月中旬以降、家族との面会については予約を頂き、ホーム南側の庭にテーブルとイスを置き、マスク着用で3～4人に限り、10分以内で行っている。そのため、来訪する家族が増え、毎週訪れる家族もいる。遠方に住む家族から手紙などが利用者の元に届くことがあり、随時、ホームの電話で家族と連絡を取り合っている利用者もいる。毎月、写真入りの「弁天の泉通信」や健康状態や生活状況を記載したホームからの手紙を家族へ送付し、日頃の様子を伝えている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の見解や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の職場会には①入居者について②業務について③その他の項目の記入用紙に職員から意見を書きだしてもらい検討している。管理者は日常的に意見や提案を聞くよう心がけている。	毎月職員会議を開催し、事前に専用ノートで意見を受け付け、それを基に話し合いをしている。職員からは様々な提案があり、業務の改善や施設整備に繋げている。キャリアパスの一環として職員は毎年目標管理シートを作成し、それを基に年2回管理者と面談を行い自己の成長へと繋げている。また、法人としてストレスチェックも実施しており、必要時には法人の医師に相談することができるようになっている。	

グループホーム柳橋

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	夜勤職員の勤務時間の変更(短縮)や日勤時間を2種類とし、職員が勤務しやすいよう環境整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	キャリアパスの一環として各自目標管理シートと個人研修計画書・管理シートを作成し、実施・評価を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	これまで市内4つのグループホームで毎月部会を開催し事例検討、救命救急講習、職員の意見交換会、交流会などを行って他施設の状況や対応方法等を参考にしてきたが、コロナウイルス対策のため、会議は中止となり電話やメールでの意見交換や情報交換の場としている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居予定の段階から、家族やケアマネジャーから詳細にわたり利用者の状況を聞くよう努めている。又、利用者本人とも面接をとって要望や心配ごとについて耳を傾け、入居後の不安を取り除くよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族が不安に思っていることや、入居後の要望把握に努めながら、どんな些細な要望やお願いごとにも真剣に聞くことで、実情を知るための努力をしている。又、職員間で情報を共有しあいながら、サービス向上に繋げていくよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	介護及び医療の両面から、当面どのようなサービスを必要としているかについて情報収集に努め、要望を的確に見極めながら把握し、入居後の日常の介護サービスに結び付けるための対応を常に心がけている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	1階では洗濯物たたみやお盆拭きなど本人の出来ることを見極めながら作業をお願いし、作業後は必ずお礼を伝えるようにしている。2階では洗濯物干しや洗濯物たたみ、草むしり、箱折りなど利用者が得意とする簡単な作業や本人が出来ることなどを見極めながら職員と協力し合える関係づくりに心がけている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナウイルス対策のため利用者の家族や知人の来訪に際しては窓越し面会を行ってきたが令和5年5月からは屋外の庭で感染対策としながら直接面会を実施してきました。コロナ終息後は以前のように落ち着いて長時間での面会ができる場所の提供をしていく。家族からのグループホームに対して気付いた点や要望に応えるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	これまで、グループホームでの行事にはご家族の他に友人に参加していただき、昔の話に花を咲かせていたが、コロナウイルス対策のため、残念ですが参加を禁止させていただいていました。しかし、夏の暑中見舞いや年末には入所者の皆さんにそれぞれ馴染みの方への年賀状を送っていただき、関係を繋いでいる。	新型コロナが5類に移行した5月中旬以降、家族に同行して友人や知人が面会に訪れている。また、ホーム内では繭玉作りや七夕行事、夏祭りの時には段ボールで作ったお神輿を披露したり花火大会、スイカ割りをするなど、昔ながらの馴染みの行事を継続できるようにしている。ユニットは違うが知り合いであった利用者があり、昔の話をするということもあるという。更に、暑中見舞いや年賀状を送り、馴染みの関係が途切れないようにしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	1階では日常の生活が狭い空間の中であるため、利用者同士の人間関係には特に気をつけている。重度の方への温かい声掛けがあればそれを本人に伝えるなど関係づくりを行っている。2階では気の合う利用者同士の席を近くにしたり、あまり会話のない利用者に対しては職員が近くに座り、利用者同士で話ができるよう間に入ること心にかけている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用者が退去後も、自宅で獲れた野菜や果物を持参してくれる家族もいる。又、入院や他所の施設に移った家族からの相談に対応している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃の利用者同士の会話や行動から利用者自身の希望や意向を把握するとともに、意思疎通が困難な方については生活歴や家族からのお話を基に推察してケアプランに活かし職員全員で共有している。専門的なことに対してはその都度相談しアドバイスしてもらったうえでケアプランに役立てるようにしている。	ほとんどの利用者が言語でのコミュニケーションが取れ、自分の思いや意向を表出することができる。職員は日常の関わりや利用者の表情、仕草などからも意向を把握するようにしている。また、家族や在宅時のケアマネジャーからの生活歴などの情報を参考にしたり、利用者の何気ないつぶやきを申し送りノートに記録として残し、職員間で共有しプランに反映するようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人に関する入居前の情報や資料を大切にしている。又、入居前に当法人の老健や他の施設を利用している場合は、その施設の担当者から情報を得て、ケアプランに活かせるよう心かけている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者本人の言動はもちろんのこと、利用者同士や職員との会話にも常に注意をはらい、些細なことも把握し管理者、看護師に報告し対応を検討するよう努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	それぞれ利用者の担当職員を決め、毎月開くカンファレンスの際に担当者から状態を確認するモニタリングシートを提出してもらっている。モニタリングシートをもとに利用者の支援方法について意見を出し合い、介護計画に取り入れるようにしている。	毎月、担当職員を中心にモニタリングを行い、それを基にカンファレンスにて支援の妥当性を検討している。介護計画の長期目標は1年、短期目標は6ヶ月で設定し、モニタリングの結果やタブレットに記録されている情報、利用者と家族の意向を踏まえた上で介護計画作成担当者が計画の見直しをしている。また、新規入居者に関しては状態を詳細に把握して支援するため、ホームでの生活が安定するまで1ヶ月ごとにアセスメントを実施している。	

グループホーム柳橋

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日常生活の記録はタブレットを使用し利用者の情報を職員全員が把握できるようにしている。特に周知が必要なことは申し送り事項に記入している。また気になることや重要なことは赤字で入力し、全職員に周知するようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族や周囲のみなさんと相談しながら、利用者の状態を的確に把握し、常に利用者自身にとって負担のない充実した介護サービスが受けられるように努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍以前は毎月、地元区の「健康達人くらぶ」や「ふれあい会食会」「文化祭」などに参加させてもらっていた。また小学生との交流会はグループホーム開設以来継続していたが、コロナウイルス対策のため中止となり参加できなかったが小学校の生徒からのビデオレターが届き、みんなで視聴して楽しんだ。今年は4年ぶりに地元諸区の子供みこしでの交流で楽しむことが出来た。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前の受診状況を把握し、かかりつけ医を変更しない方が良い場合は家族に協力してもらい受診を継続している。かかりつけ医の受診は必ず看護師が付き添うほか、時には入所者と接して日常生活の状況を知っている介護職員も付き添い状況を報告をしている。又、本人の状態により専門医の受診が必要と思われた場合は家族に相談し受診を進めている。家族も医師からの説明により本人の状態を理解してもらっている。また、入所者の状態把握と健康維持のため、定期受診を行っている。	利用契約時にそれまでのかかりつけ医やホームの協力医を選択できることを伝えている。基本的にはかかりつけ医や専門科への受診は家族に付き添いお願いしているが、必要に応じてホームの看護師や管理者が対応しており、協力医への受診はホーム職員が付き添い、受診後には電話や手紙で家族へ結果を伝えている。また、歯科についても住診があり、必要な方には診療だけでなく、口腔ケアも行っている。ホームとして非常勤の看護師が2名配置されているため、日頃より医療的な観察ができ、必要時にはスムーズに医療機関へ繋げることができる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	利用者の普段の行動や症状などに異変が見受けられる場合は、直ちに看護師に状態を伝え、場合によっては医療機関を受診することもある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	当法人の診療所または他院に入院時でも症状や経過など細目に連絡をとり、グループホームでの生活が可能になればすぐ退院できるように連絡をとった。なお、当法人の診療所に入院する場合は病状の把握や相談は比較的やりやすい環境にある。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	法人の方針で、グループホームとして看取りまでは行わないことを入居申請書提出の際、家族や関係の皆さんに説明し理解を求めている。併せて、重症化した場合の対応についても法人内の老健施設や診療所への移動があり得ることを説明し、共通理解としている。特養への申込があった場合は手続きの支援も行っている。	「重度化した場合の対応に係る指針」があり、入居時にはホームの方針として看取りを行わないことを家族に説明し、重度化した場合には適切な医療やケアが受けられるように、法人内外の施設への住み替えをお願いしている。また、重度化しそうな時に随時家族と話し合い、スムーズな住み替えができるようにホームとして全面的に支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	内部研修で利用者の急変時の対応について学ぶとともに、日々の生活の中で利用者の状態の変化に気づけるようにしている。コロナ禍以前はグループホーム部会が主催する救命救急講習に参加していたが、現在は施設の母体の医療法人柳泉会が実施する「普通救急救命講習訓練」を実施している。その他専門的な対応については看護師から指導を受け、対応できるようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防法で定める年2回定期的に防災訓練を実施している。その際、消防設備保守会社の職員の出席を求め、専門的な立場からアドバイスをいただき次回に役立てるよう努めている。同時に、職員が消火器や火災通報装置の使用方法を確認し非常時に備えている。コロナ禍以前は運営推進会議委員に訓練を見てもらい終了後会議を開催していたがコロナウイルス対策のため委員さんの参加や会議は中止を継続している。	年2回、6月と10月に通報、消火、避難、搬送訓練を実施している。ハザードマップ上ではホーム周辺に危険箇所はない。新型コロナ禍で消防署員が訓練に参加することはないが、消防設備保守会社職員のアドバイスを基に訓練の振り返りを行っている。また、緊急連絡網や防災マニュアルも整備されており、地下倉庫には長期保存が可能な水や食料が備蓄されている。法人として地区との防災協定を結んでおり、当ホームも市からの要請で災害時の福祉避難所として一時的に数人を受け入れることになっている。BCP(事業継続計画)が策定されており、自家発電装置もあり、2日間、電気系統が維持できるようにしている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	法人の「接遇委員会」で月々の目標を定め、接遇委員が中心となり毎月反省を行い、次の目標に活かしながら活動している。また、月2回理事長、総師長による接遇についての勉強会を行い、意識の向上を図っている。	法人内の接遇委員会で毎月の目標を決め職員へ周知し、理事長や総師長による接遇勉強会を開催することによって職員の人権意識を高めている。現在、男性介護職員がいないため、異性の介助に拒否をされる方はいないが、日頃より職員は言葉遣いなどに注意している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活をとおして、利用者の言葉や表情から何を希望しているかを酌み取ったり推測をしたりして、直ぐに支援できるよう日頃から心がけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	1階では入浴や食事、体操やレクリエーションの時間は予め決めたくえで対応しているが居室で過ごしたい方、好きなテレビ番組を見たい利用者など、それぞれに過ごしてもらるようにしている。2階ではレク活動や庭の散歩など、その都度声掛けにより促しているが、利用者自身が望まないときには自身のペースでリビングや居室で過ごしてもらうよう努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	1階では女性は鏡の前で髪をセット出来るよう、男性は自分で髭剃りをするよう支援している。着替えの際には本人に服を選んでもらうようにしている。2階では男性の髭剃りは鏡を見て出来るように支援し、女性の髪の手入れは寝癖直しを職員がスプレーし、自分で櫛でとかしてもらうよう支援、衣類は本人が気に入っている物を選ぶよう一緒に準備したり、自分で体温調整できるように支援している。		

グループホーム柳橋

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	現在、入所者の食事はチルド方式となっているためグループホームでは調理はしていませんが、ご家族が持って来てくれた旬の野菜などは入所者さんと一緒に皮むきをしたりして美味しくいただいている。	献立は栄養面やバランスが考慮されたチルド食を導入しており、中には行事食なども組み込まれている。ほとんどの利用者が自力で摂取でき、一人ひとりの状態に応じて刻んだり、とろみを付けたりしている。ホットケーキやお好み焼きなどをおやつとして手作りすることもある。また、利用者の誕生日には3時のおやつ時にケーキやプリンを提供しお祝いし、楽しめるようしている。更に、クリスマスにはノンアルコールのシャンペン、お正月に甘酒などを提供することもある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	コロナ下、安全で栄養バランスやカロリーが考えられた食材を温めて提供している。ひとり一人の食べる量を把握しその人に合った量を提供している。水分は夏は熱中症対策で起床時とお昼寝の後、ポカリ1杯分を出している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後歯磨きを促し出来ない利用者は介助で行っている。訪問歯科で月1回検診と口腔ケアの受診ができ、また訪問歯科による勉強会を開催してもらい歯間ブラシの介助の方法などより丁寧なケアが出来るよう努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	1階ではリハビリパンツや尿取りパッドを使っている利用者は大勢いるが日中は声掛けや誘導でトイレでの排泄を促すことにより失禁は少なくなってきた。逆に、自らトイレに行く利用者が失禁していることがあるので、排泄時の様子できるだけ確認するようにしている。トイレでの排泄を基本とし、個々の排泄パターンを基にトイレ誘導を行っている。リハビリパンツや尿取りパッドについてもその方に合った物を検討し使用している。2階では日中の声掛けや誘導でトイレでの排泄を促している。日中の失禁はほとんど見られないが排便困難な方が多く、下剤でコントロールしている。緩い便の時などは失敗することもあるが本人の気持ちを尊重した対応を心がけている。トイレの位置がわからない入居者のため張り紙などをして支援している。	トイレでの排泄を基本として、排泄チェック表や一人ひとりのパターンを基に随時トイレ誘導している。布パンツの方が各ユニット数名ずつおり、また、リハビリパンツとパッドを併用したり、夜間のみポータブルトイレを使用する方など、一人ひとりに合わせている。入居前にはパッドが必要だった方がトイレ誘導によってパッドが不要になるなど、失禁を減らしたり、気持ちのよい排泄ができるように努めている。また、排泄用品については価格面や使い勝手の面から検討して、随時家族に相談し使用している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便をチェックし個々の排便の間隔を把握している。食事も食物繊維の多い物を取り入れるなど工夫し、水分摂取も促している。便秘の方は下剤による排便コントロールを行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	1階、2階とも週2回の入浴を基本とし体調を確認し行っている。見守りや介助が必要な方がほとんどで、重度化しているため利用者と職員の負担を軽減するため福祉用具も購入している。出来るだけゆっくりと入浴が出来るよう入浴時間を工夫している。また季節が感じられるよう時々入浴剤を替えたりしている。利用者の状態低下も見られており、職員の負担も考え福祉用具の購入、使用をしている。	殆どの利用者が見守りや一部介助など、何らかの介助を必要としている。若干名の方がスタッフ2名の介助で浴槽の出入りをしている。職員の安全や負担軽減のために随所に手すりを取り付けられ、現在必要とする方はいないがシャワーチェアもありいつでも使用可能となっている。利用者の中には入浴を拒否される方がいるが、そのような時は時間を置いたり、次の日に入浴を促すなど柔軟な対応をしている。また、季節に応じて菖蒲湯やゆず湯を行ったり、随時入浴剤を使用したりしている。	

グループホーム柳橋

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	居室でひとりで気楽に休む以外にも、リビングにソファを置き自由に休めるようにしている。季節に応じた過ごしやすい室温管理に気を配るとともに、少しでも過ごしやすい快適な環境づくりに努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	受診したうえで医師からの処方をもとに看護師から説明を受け対応している。又、投薬の間違いをなくすために、必ず氏名を色分けしてあることを再確認したうえで利用者ごとの内服薬チェック表に記入して、投薬をするようにしている。又、内服薬の効能が分かるように利用者ごとのファイルにまとめ、いつでも見ることができるようしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	1階ではそれぞれ洗濯物たたみ、台拭き、ペーパーたたみ等出来る手伝いをお願いしている。読書の好きな方には好みに合った本を置くなどしている。些細なことでも、できる限り利用者同士が会話ができるように誘導していくように心がけている。2階では家族や周囲から聞いた生活歴やグループホームでの生活を通して好きなことや趣味、興味を見つけ出すように心がけている。庭いじりや草むしりが好きな方には職員が付き添って一緒に行っている。手先が器用な利用者には雑巾縫いや季節の貼り絵を作成してもらいリビングに飾っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	これまでは、地元諸区が主催する月一回の「健康達人くらぶ」を楽しみにしている利用者もいた。全員で外出する機会を計画し、お花見など季節ごとの行事には家族に声をかけ一緒に参加してもらおう心がけ、地域のボランティアに協力してもらっていた。コロナウイルス対策のため外出できない状況が続いていたが1階ではお天気のいい日は、グループホーム南庭の遊歩道を散歩したり庭のベンチでみんなで歌を歌ったりしている。2階ではその日の天候を見ながら交替で庭などの散歩に出かけるよう努めている。	新型コロナ以前は地区の行事や地元小中学校の行事に参加したり、年間計画を立てて外出をしていたが、現在は自粛している。そのような中、日常的にはホーム周りや庭の散歩、草取り、リビングでラジオ体操をするなど、できる限り体を動かす機会を設けている。また、コロナウイルス感染症が下火になった時期に市内の公園に花見に出かけたり、バラの見学に隣市の公園にドライブを兼ねて外出をしたりして楽しんだという。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	1階、2階とも、現在金銭を自分で所有している利用者はいないが、預り金を施設で管理して本人に必要な物を購入している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	1階では利用者全員がご家族や知人に年賀状や暑中見舞いを書くことになっているので宛名書きなどの支援をしている。ご家族から届いた手紙や写真を部屋に飾ったりしている。2階では利用者全員が家族に年賀状・暑中見舞いを書いている。書ける利用者さんには宛名も記入していただいている。時折、お孫さんや甥御さんからの手紙に涙ぐむ姿もあります。また一緒に送られた写真を部屋に飾ったりしています。		

グループホーム柳橋

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室やリビングはすべて南向きであるため日差しが入りやすくなっているが、窓が大きいため夏場は暑くなるので、状況に応じてエアコンを使用して快適な環境に努めている。また毎月々、利用者と職員と一緒に作成した貼り絵やカレンダーを居室に飾って季節を感じていただけるようにしている。	空調はエアコンとパネルヒーターで管理され、随時調節されている。リビングは広く、窓も大きいことから遠くの景色が良く見え、ゆったりとくつろぐことができる。また、季節感を感じることができるようアクティビティーで作成した貼り絵などが飾られている。訪問時、リビングからは利用者と職員の歌声が何度か聞こえてきており、塗り絵、パズル、将棋などを日頃楽しみくつろいでいるという。浴室はやや広めで半埋め込み式の浴槽があり、随所に手すりが設置されシャワーチェアもあるため、安全に入浴できている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	気の合う利用者同士でお互いの居室を行き来したり、晴れた日は窓辺で日なたぼっこを楽しんでいる利用者もいる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	1階、2階とも家族の写真を飾ったり、使い慣れたものを持って来ていただいている。また、レクの時間に作ったものを飾り、心地よい居場所づくりに心がけている。	居室内はエアコンとパネルヒーターで調節され、ベッドとキャビネット、洗面台が備え付けられている。基本的には持ち込みは自由で、居室にはテレビ、座いす、座布団などが置かれ、親族の写真が飾ってあったり、アクティビティーで作成した貼り絵や折り紙が飾られており、一人ひとりが自由に暮らしていることが窺えた。また、居室からは田んぼやブドウ畑が見え、居ながらにして季節を感じることができる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの位置が分かりにくい利用者もいるので、貼り紙をしたり廊下に矢印をつけたりしている。又、居室には表札をつけているが、それ以外にも廊下から見えるよう名前や自印をつけている利用者もいる。居室にあるキャビネットには、片付けやすいようにシールを貼り自身で出し入れしやすいように工夫している。		

グループホーム柳橋

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容